本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等をすることは、法律で認められた場合を除き禁じます。

世界を「数字」で回してみよう(54) 働き方改革(13):

政府の地雷? 「若者人材育成」から読み解くひきこもり問題

http://eetimes.jp/ee/articles/1812/28/news047.html

今回のテーマは「働き方改革」の「若者人材育成」です。「若者人材育成」をよく読み解いてみると、その根っこには、深刻な“ひきこもり”問題が存在していることが分かります。

2018年12月28日 10時30分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

「一億総活躍社会の実現に向けた最大のチャレンジ」として政府が進めようとしている「働き方改革」。しかし、第一線で働く現役世代にとっては、違和感や矛盾、意見が山ほどあるテーマではないでしょうか。今回は、なかなか本音では語りにくいこのテーマを、いつものごとく、計算とシミュレーションを使い倒して検証します。⇒連載バックナンバーはこちらから

「ひきこもり」に、私たちのマインド面からアプローチしてみる

厚生労働省が定義する「ひきこもり」とは、「**仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6カ月以上続けて自宅にひきこもっている状態**」をいい、時々は買い物などで外出することもあるという場合も「ひきこもり」に含まれます。

今回からテーマは「若者人材育成」に移ります。私は、政府の働き方改革の「若者人材育成」について調査し、さらに、この「ひきこもり」についても、インターネット上の公文章、論文、書き込み、そして、動画に至るまで調べてみました。その結果、内容はおおむね以下の3つに大別されるようです。

(1)厚生省、地方自治体の「ひきこもり」の人達に対する支援サービスについての公知
(2)「ひきこもり」をしている人たちの状況または意見(「苦しみの告白」から「新しい価値観の主張」までさまざまな意見)
(3)「ひきこもり」をしている人たちに対する、批判、非難、罵倒、怨嗟。一言で言えば「**憎悪**」

特に、この最後の「憎悪」は激烈でした。ここでは記載できない程の、過激で差別的な表現で記載を簡単に発見できます(新聞会社が運営する電子掲示板形式の投稿コーナーなどを探せば、すぐに見つかります)。

そして、残念ながら、私自身ですら、「予備知識もなく、調査もせず、現場を知らず、問題の全体象を把握していない」という状態であったら、『このような考え方をしたかもしれない』と思いました。

ですので、今回の「若者人材育成」は、その課題からアプローチするのではなくて、

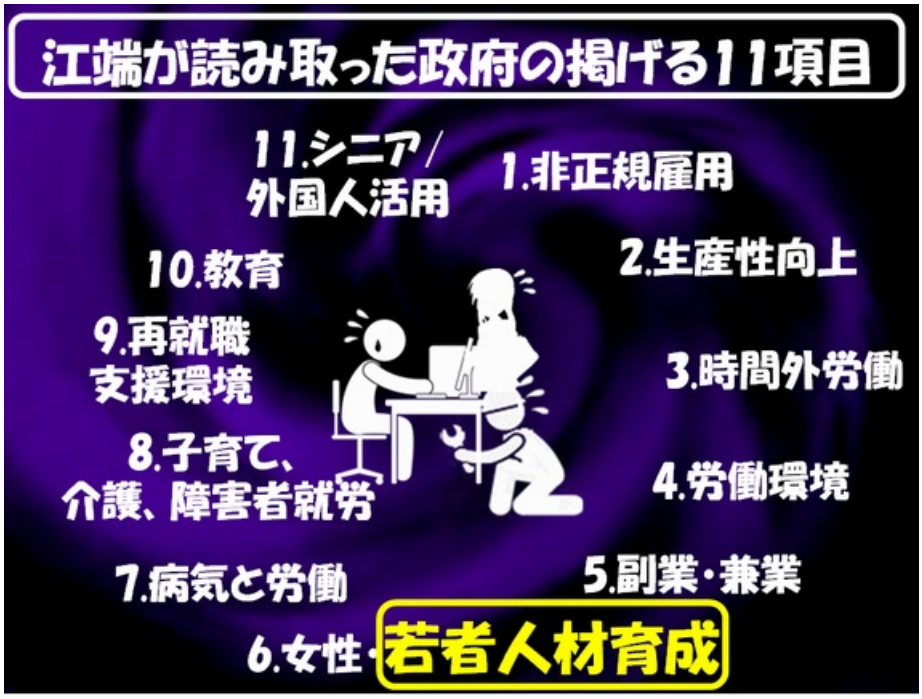
―― なぜ私たちは、これほどまでに「ひきこもり」を憎むのか

という、私たちのマインド(心)面から、アプローチしてみたいと思います。

こんにちは、江端智一です。

今回は、政府が主導する「働き方改革」の項目の一つである、「女性・若者人材育成」の中の、「若者」に関する(i)「働き方改革実行計画」から逆算して見えてきた問題の正体、(ii)「スキル」と呼ばれるモノの明確化、そして、(iii)「ニート/ひきこもり」について ―― **特に私たちのマインド側から** ―― 把握してみたいと思います。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



「若者」にまつわる働き方改革の“根っこに潜む問題”

さて、働き方改革実行計画の中で、「若者」をキーワードとして検索すると10箇所ヒットしますが、基本的には法律とお金（の金額）の話です。

「働き方改革実行計画」の中の"若者"

"若者"に関連する法律や制度の概要一覧

法律	概要
■雇用保険法	いわゆる「失業保険」のことだが、現役労働者や企業の支援も含む
■若者雇用促進法	(1)「ホワイト企業」を認定して、若者に優先的に職を斡旋する (2)「ブラック企業」を斡旋しない
■職業安定法	いわゆる「ハローワーク」運用の法律
(*)次世代育成支援対策推進法	いわゆる「子育て支援」の法律

ただ、その"若者"の検索の前後を読むと、政府が"若者"の働き方について考えている、5つのポイントが見えてきます。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

「働き方改革実行計画」の中の"若者"

全文から"若者"にヒットした箇所を要約してみる

趣旨	概要
(1)「働き方」の選択への対応	今や10人に4人が非正規労働者での新しい「働き方」への対応
(2)人材育成環境の整備	「就職→退職→スキル取得→就職→退職→スキル取得・・・」のリカレントな就労への対応
(3)優良企業の認定制度	「"若者"ガンバレ」の時代から「"企業"がガンバレ」時代への移行
(4)就職氷河期世代の支援	就職氷河期の非正規/無職が40万人以上、特に「35歳以上フリーター」の救済が急務
(5)正確な会社情報の開示	若者を使い捨てる「ブラック企業」を事前にさらす

さすがに「若者のメンタルを鍛える」などという、バカげた記載はない

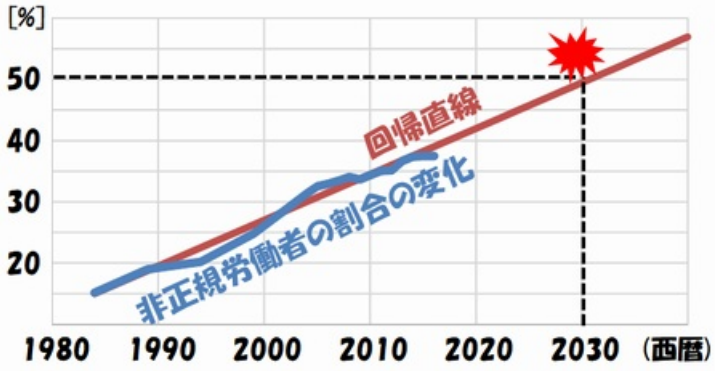
上記のリストの内容を、裏読みすれば、

(A)正規労働者を前提とした社会はもうダメだろう
(B)これまでの「修学→就職→退職」のパターンは壊れるだろう
(C)企業が従業員を教育する従来のOJT(On Job Training)は期待できないだろう
(D)ブラック企業による若者の使い捨ては増加していくであろう

という、冷静な分析がされていることが読み取れます。

再掲:非正規雇用が「当たり前」の時代

非正規労働者は、順調に増加中



で、当然のことながら、その本当の狙いは「若者の幸せな労働の実現」……などではなく、「**『少子化社会における、高い生産性を有する労働力の確保』の一択**」であることは、言うまでもありません(関連記事:「誰も知らない「生産性向上」の

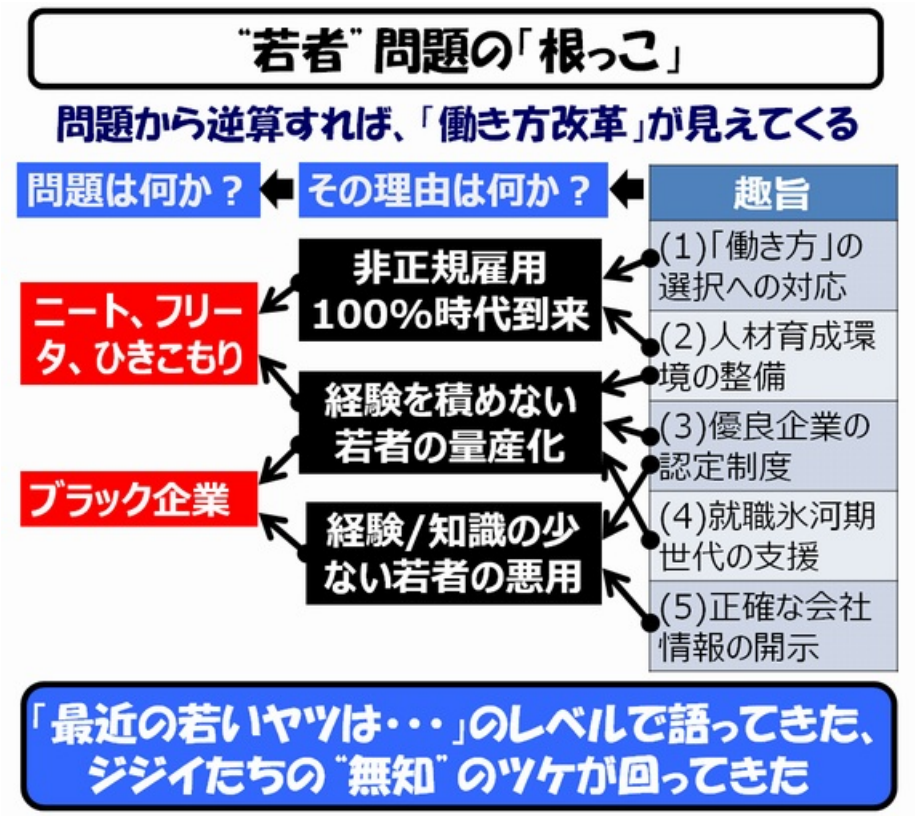
Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

正体 ～“人間抜き”でも経済は成長?」)。

ただ、このリストからは、このリストの内容に至る「直近の問題」が何なのかが読み取れません。

そこで今回、私は、この計画書を立案したメンバーの一人の気持ちになって ――『月当たり残業時間が100時間を越えたくらいで過労死するのは情けない』とかほざくアホな大学教授*)を、ミーティングルームの外に追い出した後 ―― ホワイトボードに記載されていた(であろう)内容の復元を試みてみました。

*)関連記事:「データは語る、鉄道飛び込みの不気味な実態」



つまり、前述した(A)から(D)のうち、「(i)非正規雇用社会を前提として、(ii)若者のスキルアップの機会が失われ続け、(iii)若者の無知に付け込む悪質な企業が今後も登場する」という世界の根っこにあるものは、「**フリーター／ニート／ひきこもり**」と「**ブラック企業**」の2つだったに違いない、と、私は予想しました。

今回は、この1つ目である「フリーター／ニート／ひきこもり」の観点から、この問題を見ていきたいと思います(次回は、「ブラック企業」の検討をします)。

「フリーター／ニート／ひきこもり」に共通する問題

さて、最初に、「フリーター／ニート／ひきこもり」について整理しておきたいと思います。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

フリーター、ニート、ひきこもりとは

一緒くたにして、乱暴に理解していないか？

用語	概要		
	対象	労働形態	例
フリーター	15～34歳	仕事している(ただし、非正規労働者)	パート、アルバイト、契約社員、派遣社員、嘱託社員
ニート		仕事していない「家事・通学・就業をせず、職業訓練も受けていない者」	■「労働することができない」という点で同じ ■両者を明確に分ける基準がない(“年齢”と“移動空間”のイメージくらい)
ひきこもり	年齢制限なし	仕事していない「仕事や学校に行けず家に籠り、6カ月以上家族以外とほとんど交流がない人」	

ネットを使って部屋で仕事をしている人は、「ニート」でも「ひきこもり」でもない

まず、フリーターは「仕事をしている」という点で、ニートやひきこもりとは異なります。ただ、仕事に「雇用期間の定めがある」あるという点が、「正規雇用」と違うだけです。ただ、この3つに共通する問題はあります。「**スキル問題**」です。

ここで言う「スキル」とは、仕事を行うための能力のことを言います。しかし、その「仕事を行うための能力」というものを、具体的に説明できる人は少ないようです*)。

*）家族にも聞いてみましたが、『うーん……、パソコンで文章を作れるとか？』という程度でした。

しかし、それでも、ニート／ひきこもりは言うに及ばず、フリーターであったとしても「雇用期間の定めがある」ということは、**継続して同じ仕事を続けることができない**ことになります。雇用期間後に、別の仕事に移動した場合、移動前の知見（ノウハウ）が使えずリセットされて、別のノウハウを最初から学び始めなければなりません。

このような状態が続けば、高度で希少価値の高いスキルを取得することはできず、低コストの汎用性の高い、誰にでもできるような低レベルのスキルしか身につかないことになります。

当然、その人の労働力としての価値も賃金も低いまま維持されます。労働価値としての競争力も低いままですので、転職の度に苦労し、低い収入で働き続けることになります。結婚や、社会保障を受けることすら難しい貧困状態にもなり得ます。

つまり、我が国においては、「**最初の就職でのスキル取得に失敗すると、そこからの復活戦が恐ろしく難しい** 」ということなのです*)。

*）あふれるような能力や気力や才気があり、そんな失敗をものともしない人。私はあなたが嫌いです。

しかし、現時点において、正社員として採用された大卒の新入社員における、3年以内の離職率は3割程度を継続しています（高卒で5割、中卒で7割）。この主たる要因が「**雇用のミスマッチ**」といわれているものです*)。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

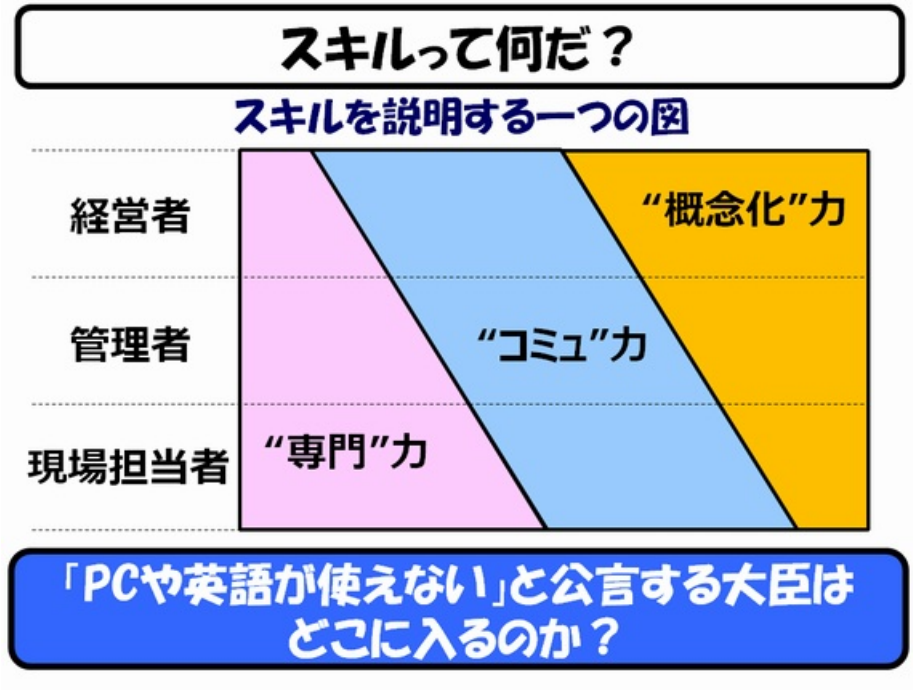
＊）これを、「若者の努力不足や根性不足」と論じる論者がいれば、"日本の離婚率35％"の話と合わせて、合理的な説明をして頂きたいと思います。

私のようなシステムエンジニアから見れば、就業であれ結婚であれ、それは「システム」です。システムである以上、「ミスマッチ」というのはそのシステムが当然に有する特性の一つにすぎません。

これまで、我が国の政府が、この「雇用のミスマッチ」と「ミスマッチから開始されるスキル問題」を看過し続けることができたのは、人口増加社会と、その社会に基づく雇用の増加が保証されていたからであり、復活戦は（今ほどには）難しくなかったからです。

スキルに関する「アカンやつ」

ところで、"スキル"で検索すると、ロバート・カッツ氏の理論を図示した絵が大量にヒットします。



この絵を見た瞬間、「**あ、これはアカンやつだ**」と思いました。『なんとなく分かったような気にさせられるが、実際には何のことやら分からん』という典型的な「だまし絵」と思ったからです（もちろん江端の主観的な感想ですが）。

"専門"力については、英語スキルであれば、TOEICテストのスコア、英検の級とあわせて、「海外のお客さまからの商品問い合わせメールに対応した」だの「外国人が出席する会議で問題なく意思疎通ができる」だのと言えば良いでしょう。

PCスキルであれば、マイクロソフトのオフィスを使って、「Word」によるビジネス文書、「Excel」のマクロやグラフ作成の経験、「PowerPoint」でのプレゼン資料の作成などを見せて、具体的に説明できるかもしれません。

一方、**"コミュ"力（＝コミュニケーション能力）**になると、いきなり定量的な評価や表現が困難になります。

例えば「事実や数字を使って相手を説得できるように努めている」を示すくらいなら、まあ、具体例を示せば足るでしょうが、「相手の気持ちを尊重して、相手に不快感を与えずに、自分の感情や意思を相手に伝える能力」だの、「非言語的な要素（空気を読む）に十分に注意を払うことで、推察する非言語コミュニケーション能力」に至っては、定量的な説明が不可能です。

そして、**"概念化"力**に至っては、説明するもアホらしいのですが、一応項目だけピックアップしておきますと、「論理的思考」「水平思考」「批判的思考」「多面的視野」「柔軟性」「受容性」「知的好奇心」「探究心」「応用力」「洞察力」「直感力」「チャレンジ精神」「俯瞰力」「先見性」だそうです。

これは技術でも技能でもなく、単なるその人間が有する固有の先天的な能力です。もし、これをスキルと言い張るのであ

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

れば、「**図解 スティーブ・ジョブズの作り方**」とか「**1週間でビル・ゲイツになる方法**」とかいう本にして、コンビニあたりで販売してもらった方が、私としては大いに助かります。

いずれにしても、私が申し上げたかったことは、具体例で説明可能な「スキル」というのは、「**マイクロソフトのオフィスを使って文章や図面の作成ができること**」と「**TOEICのスコア**＊1)」くらいであるという、誠に面白くない事実である、ということなのです＊2)。

＊1）関連記事：「TOEICを斬る（前編） ～悪魔のような試験は、誰が生み出したのか～」
＊2）ちなみに、面接で『私には、「論理的思考」「水平思考」「批判的思考」「多面的視野」があります』とアピールして、就職できた人がいたら、インタビューに参上させて頂きたいと思います。

閑話休題

実態をつかみにくい「ひきこもり」の全体像

今回の働き方改革では、**「雇用のミスマッチ」の存在を公式に認め、そのような社会を前提とした上で、その対策に乗り出した**、という点において評価できると考えております。

ただ、この対策の内容は、まだまだ具体的といえるものではありません。これからの政府、企業、そして私たち自身も考えていかねばならないことだと思っています。

ところで、上記の「雇用のミスマッチ」の対策については、フリーター（非正規雇用）や、若者の3年以内の転職などについてはヒットする内容 ―― かもしれませんが、そもそも、労働しない、もしくは、労働できない「ニート／ひきこもり」には、この対策すら通用しません。

で、実際のところ「働き方改革実行計画」には、**「ニート／ひきこもり」に対する記載が一切ありません（本当）**。「変だな」と思って、今回は「ひきこもり」の方にウエイトを置いて調べてみましたが ―― 結構、無視できない数の対象者がいる**"らしい"**ことが分かりました＊)。

＊）ちなみに、政府は2025年までに5分野で「50万人超」の外国人労働者の受け入れを目指すとしているそうです。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

ひきこもりの全体像

世界でも例のないスケールで進行中の事象

項目	数字	その他
人口	**160万人～300万人程度(推定)**	日本労働人口6720万に対して、2%～4%程度
		40歳以上のひきこもりが、16万人程度という報告あり
男女比率	6～8割が男性(推定)	男女50:50という結果もあり、はっきりしていない
年齢比率	20～29歳に経験者が多い	別のデータでは、30歳台が40%で最も高いという報告あり
その他	高学歴の両親のいる家庭に多い	高学歴の親が、「学歴ハラスメント」で子どもを追いつめる
		経済的に依存しやすい(後述)
	外国との数値比較がしにくい	各国で失業率や就業条件が違い過ぎて、「ひきこもり」の意味が違ってくる

今回ほど、発表データがバラバラのケースは経験がない

なぜ、**"らしい"**などという表現を使ったかというと、一応、私、このコラムを書く時には、2つ以上の1次データでチェックすることを心掛けているのですが、今回に限っては、もうデータの内容がバラバラで、数値を特定できなかったからです。ですから、上記の表の数値は「大体の規模感」として見て頂きたいと思います。

それでも、200万人規模（推定）の「ひきこもり」は、それ自体が大きな潜在的な労働力のはずです。もっとも、『**国内のひきこもり200万人 vs. 有能な外国人労働者50万人**』のどっちに軍配が上がるか（というか、どっちの方がラク（コストが安い）か）は、私にも分かりませんが。

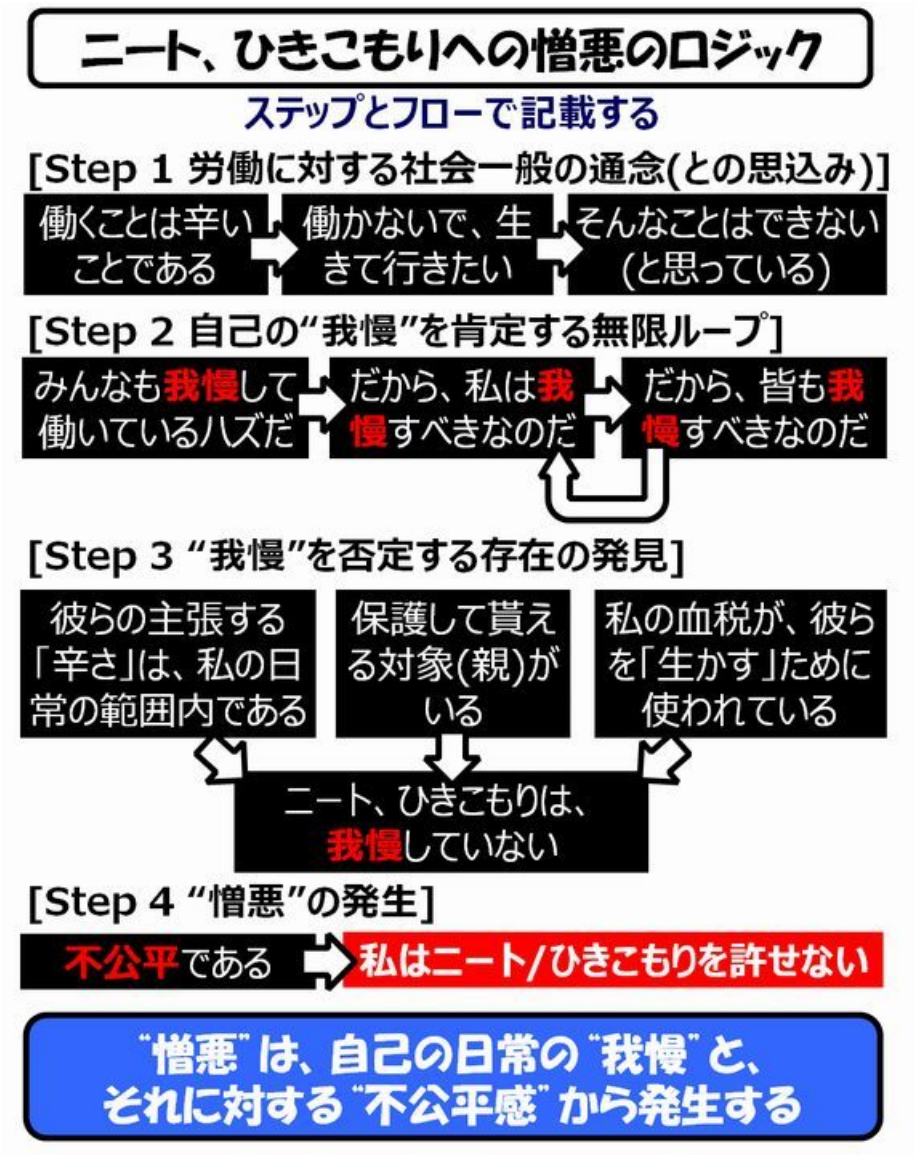
ここからは、私の推定（妄想、あるいは邪推の類い）ですが、「ひきこもり」は、政府にとっては、ある種の「地雷」だったのではないかと思っているのです。

「ひきこもり」に対する憎悪へのロジック

これが、冒頭の『（3）「ひきこもり」をしている人たちに対する、批判、非難、罵倒、怨嗟。一言で言えば「**憎悪**」』の話につながります。

今回の調査で、私は多くの「ひきこもり」を攻撃する側の人の書き込みを大量に読み込んで、この「憎悪」のロジックをおおむね組み立てられたと思います。以下にそのフローを記載します。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



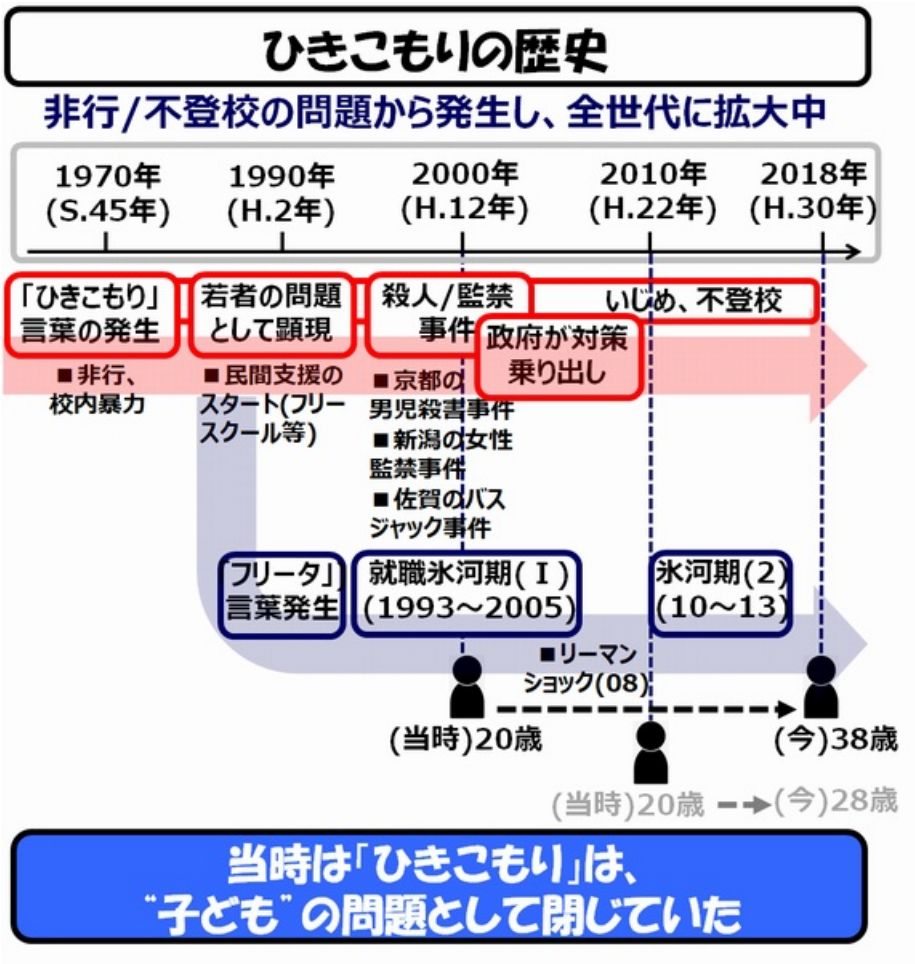
"労働"を示す英単語"labor"は、ラテン語のtoil（苦役）, pain（苦痛）からフランス語を経由して14世紀に英語に入ってきたそうです。で、まあ、実際のところ、私たちは、基本的に「仕事は苦痛」であるということを、日常生活で思い知りながら生きています。

そういう意味では、この「憎悪のロジック」には、（一方的な見方ではありますが）一定の客観性があり、共感も得られやすいと思います。そして、「政府が手を出したくないなぁ」と考えても、私はそれを責めることはできないように思えます（私だって、この話題からは逃げたいと思いました）。

「ひきこもり」にネガティブなイメージがついたのは、なぜか

ロジックの是非はさておき、まずは「ひきこもり」の歴史を調べてみました。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



諸説ありますが、**「ひきこもり」が最初に使われたのは1970年代**という説があります。これは、当時発生した、非行、校内暴力事件に端を発し、その暴力に耐え切れなくなった子どもたちが、登校することができなくなったことを指していました。まだ「いじめ」という言葉はなかったようですが、同じものです。

その当時は「ひきこもり」とは言わず「不登校」という呼び名で取り扱われており、その救済レベルも、民間のフリースクールなど(あの有名な「戸塚ヨットスクール」も含む)でした。

大きな転機を迎えたのは、2000年ごろに連続で発生した3つの殺人および監禁事件です。これらの事件の犯人が全員「ひきこもり」状態だったことから、「ひきこもり」という言葉は、「犯罪リスク」を伴うというイメージで世間にデビューすることになり、政府が10代20代における「ひきこもり」の調査に乗り出すことになります。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

ところが、この「ひきこもり」は、実はもう一つのルートでも動き始めていました。それが、その当時「自由な働き方」としてもてはやされた**「フリーター」という労働形態**です。これは「バブル景気」という背景のもと、大々的に拡大しました。

当然ですが、その当時、バブル崩壊→経済危機→転職困難→スキル問題、という流れを予想できた人は、日本には一人もいなかったのです。

さらに、ここに、バブル崩壊から始まった「**就職氷河期（第1期）**」が襲い掛かります。大手企業は新卒採用の枠を減縮する（または、採用をゼロにする）などして、学校を卒業予定の若者たちを就職市場から締め出しました。こうして、以前のポジティブな「フリーター」ではなく、**ネガティブな「フリーター」が大量生産**されることになったのです。

当然ですが、これは「就職浪人」という形の若者を量産することになりました。しかし、我が国が「浪人」と名の付く者に対して、恐ろしく冷酷な取り扱いをすることは、昨今の医学部入学差別事件を見ても明らかです。

こうして、「スキル問題」を抱えたままの若者は、**今40歳近く**になり、前述したような、スキル問題の負の連鎖を続けている人口は、一説には**40万人**いるといわれています。

しかし、この悲劇はこれだけでは終わりませんでした。

2008年のリーマンショックで、再び、「**就職氷河期（第2期）**」が始まり、同じような「スキル問題」を抱えた若者が量産されることになりました。

この2つの氷河期を経て、私たちは、「経済成長」というものが、本当に失くなったことを思い知りました。そして、**「経済成長」を前提とする経済戦略では、もう対応できない**と認め、それが、今回の「働き方改革」の"若者"編に反映されたと考えられます。

「ひきこもり」の発生原因は、いまだに分からない

では再び、「ひきこもり」の話に戻ります。

このような「就職氷河期」だけが「ひきこもり」を産み出したと考えるのは早計です。調べてみたところ、「ひきこもり」の発生原因は、いまだに分かっていないのです。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

ひきこもりの発生

仮説の域を出ていないが、以下の説がある

要因	内容	例
(1) 外部環境	つまづき、体験、トラウマ	自分の性格、容姿、能力に対する過剰な自意識
		他人との価値観の差、人間関係との不安、トラブル
(2) 不登校	学校が要因	6～8割が「不登校」の経験者
		但し、不登校からの連続するケースは2割程度
(3) 負の連鎖	**トラブルが別のトラブルを誘引**	**例：数日の休み→日常復帰への恐怖(勉強/仕事)→心の病→ひきこもりの長期化**
(4) “ない”	**本人すら分からない**	**自分でも理由は分からないが、外出できなくなる**

『このような“入口探し”には意味はない』という論説もある

個人の性格や能力に因るもの（上記（1））である、とか、不登校からの連続性（上記（2））など、各種の論が唱えられていますが、私は、上記（3）（4）の説を支持しています ―― というのは、私がとても共感できる説だからです。

個人的な話になるのですが、私は、社会人の10日間近くに及ぶ長期休暇とか、学生たちの40日近くに及ぶ夏季休暇の廃止を主張する者の一人です。理由は簡単。「11日目の出社が死ぬほど憂鬱だから」です*)。

*）長期休暇後の出社/登校が楽しみでたまらないという人。私はあなたが嫌いです。

もし、このような長期休暇が「ひきこもり」のきっかけになっていると言われれば、私は強く賛同します。実際、一日休暇を延せば、その次の日がさらに辛くなることは、行動経済学的にも論証されていますし、私も以前シミュレーションでその事実を示しました（関連記事：「未来を占う人工知能 ～人類が生み出した至宝の測定ツール」）。

一方で、このような議論には意味がないという考え方もあるようです。**「ひきこもり」は、現時点では原因が特定できておらず、いつでも、誰にでも罹患するインフルエンザのようなもの**だからです。

インフルエンザに罹患した後、その原因を探るのは ―― 意味がないとは言いませんが ―― 罹患した人個人にとっては、あまり有益なことではないでしょう。むしろインフルエンザの早期治療、健康の回復の方が、はるかに重要です。

一方、「ひきこもり」の理由を理解することには意義がありそうです。現時点では**「病気」と「逃亡」**が有力な説です。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

ひきこもりの理由

下記の2つは、完全に分けて考えることはできない

要因	内容	例
(1) 病気	肉体的疾患で外出できない	ケガ、疾病によって、外出できない状態
	心因的疾患で外出できない	うつ、パニック障害、社交不安障害、統合失調症、認知症で、外出できない
(2) 自己からの逃亡	**「現状の自分」を認められない**	**ひきこもっている限り、「現状の自分」を直視する必要はない**
		「ある自分」と「本来あるべき自分」との差を確定したくない

「出ない」のではなく「出られない」

上記の(1)の病気については、これはどうしようもありません。基本的には「病気」は、治癒するしかありません。上記(2)の「自己からの逃亡」についても、同様に、本人以外ではどうしもようないことです。「逃亡」は、人間の自己の生存本能に基づいてDNAレベルで組み込まれている、基本スペックであるからです。

「ひきこもり」のインフラを作り出したのは、われわれなのか

ところが、この「ひきこもり」は、単に「ひきこもれば良い」というものではありません。「ひきこもり」を貫徹するためには、どうしても2つのモノがそろっている必要があるからです。**「支援者」と「武器」**です。

"ひきこもり"を貫徹するために必要な物

「生存」と「逃亡」を担保する支援者と武器

要因	内容	例
(1)親	「生存」を担保してくれる支援者	ひきこもり(その是非/内容はどうあれ)は、支援者の存在なくして、続けることはできない
(2)ネット	**自己批判から「逃亡」するための武器**	**"何もしない"から逃げられるものなら、何だっていいが、ネットゲーム、マンガ、アニメは、コスパの高いツール群**

"ひきこもり"とは、24時間365日、"自己批判"から逃げ回ること

言われてみれば、当然のことのように聞こえるかもしれませんが、「ひきこもり」に「支援者」が必要と気がついたのは、厚生労働省のこの資料の「モデル事例」を読んでいた時のことでした(もちろん、この支援が「甘やかし」とかいう、単純な話ではないことは、この事例を読むだけでも分かります)。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

もう一つは「ネット」という武器です。「ひきこもり」というのは、基本的に「自己防衛のための逃亡」です。外界の敵から自分を守るためには、「ひきこもり」というのは有効な手段なのですが、たった一人だけ、「引きこもり」では対抗できない敵がいます。

「**自分**」です。「自分が自分を責める」ということからだけは、どうしても、逃げることができないのです。

そのような時間を1秒たりとも作らないためには、自分の意識を別の世界に置き、かつ、それを維持し続けなければなりませんが、これは、相当な体力と集中力を要するはずです。『自我が消されるほどに夢中になれるもの』があれば良いのですが、そのようなものがあるのであれば「ひきこもり」をする理由もなかったでしょう。

が、それをやすやすと提供できる夢のようなものがあるのです ―― **「ネット」**です。

インターネットにつながったパソコンは、ネットゲーム（ネトゲ）、マンガ、アニメなどの各種のコンテンツを果てしなく提供し、自分の素性を開示せずに無責任な発言を無限に垂れ流すことができ、そして、**1日十数時間もの膨大な時間、実存する自分との対決を回避し続けることを可能とする「魔法の箱」**です。

今、私は、一つの"不愉快な"仮説に思い至っています。

「ひきこもり」のインフラ（基盤）を完成させてしまった当事者は、実のところ、私たちのようなネットワークのエンジニアではなかったのだろうか ―― と。

信じられないかもしれませんが、私は、IETFの標準化提案を行っていたころ（著者のブログ、「世界中の人が意見を交換できる世界が完成すれば、世界は一つとなり平和になる」と、本気で信じていたのです*）。

*）先日、この話を後輩にしたら、鼻で笑われました。

私には、人を自殺に追いやる裏サイトや、悪質な匿名メッセージや、一つの国の社会システムを混乱させるサイバー攻撃や、ましてや「**ひきこもりのインフラ**」を作るつもりなど、全くなかったのです。

今、私は、「ネットのない社会の方が、今よりもずっと良い世界だったのではないだろうか」と考え込むことが多くなりました（関連記事：「メイドたちよ、“意識高い系”を現実世界に引き戻してやれ！」）。

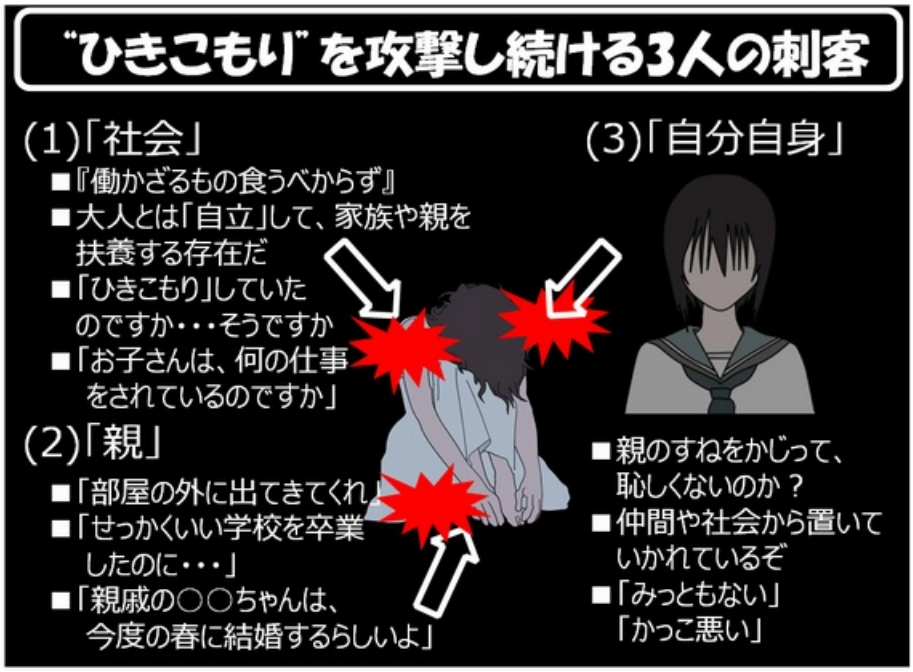
「ひきこもり」は、たった一人の戦争

それはさておき。

「ひきこもり」を憎悪する人は多いようですが、いろいろ調べていくと、「ひきこもり」とは、**脱出口が見つけられずに、いつまでも暗闇の中をさまよい続け、途切れることなく続く、苦痛と恐怖の時空連続体** ―― 少なくとも『憎悪』の対象足りえない ―― ということは間違いなさそうです。

先に述べたように、「自分が自分を襲ってくる」ということを含めて、「ひきこもり」は、少なくとも3人の刺客と「たった一人の戦争」を果てしなく続けなければならないものだからです。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



現時点において、この問題を一気に解決する方法は見つかっていません。

第一、ちょっと調べたくらいの私が解決できるくらいなら、この問題は、とっくに解決しているはずですし、政府だって、「働き方改革実行計画」に、『「ニート／ひきこもり向け」の働き方』という項目を掲げていたことでしょうし ―― 何より、苦しみながら「ひきこもり」を続けざるを得ない人たちを救出することができたはずです。

つまり、結局のところ、私には、「ひきこもり」を現象として理解できても、解決方法が全く分からないのです。今の私に言えそうなことは、以下のような陳腐で空虚な、そして、何の役にも立たない提言だけです。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

“ひきこもり”に関するアプローチ

これといった決め手ではないが、「3人の刺客」に協力を頼むとしたら・・・

要因	戦略	江端からの提言
(1)「社会」	**「明日は我が身」**と思う	“ひきこもり”は、ちょっとしたことや原因が分からないまま、誰にでも起こる。
		自分が”ひきこもり”になる可能性はゼロではない。だから「憎悪」を口にするのは止めた方がいいと思う。
(2)「親」	**「自分の子どもが分からない」**のままで良い	“ひきこもり”を理解することは諦めてもよいと思う。子どもは「捨て」て、あなたの人生を生きていいと思う。
		可能であれば、”ひきこもり”の支援者の役から降板していいと思う。
(3)「自分」	**「あるべき自分」**を忘れる	■あなたのことなんか、誰も気にしていません。3秒もあれば忘れます。自惚れないで下さい。
		”ひきこもり”が楽なら続ければいいし、苦しいなら、試しに中断するのも良い(後で再開してもいい)と思う

抽象論で大変申し訳ないが、これが精一杯

なぜ、私たちは「ひきこもり」を憎んでしまうのか

　それでは、今回のコラムの内容をまとめてみたいと思います。

【1】政府が主導する「働き方改革」の項目の一つである、「女性・若者人材育成」の中の、「若者」に関する(i)「働き方改革実行計画」から逆算して見えてきた問題の正体、(ii)「スキル」と呼ばれるモノの明確化、そして、(iii)「ニート／ひきこもり」について ―― 特に**私たちのマインド側**から ―― 把握を試みてみました。

【2】「働き方改革実行計画」の中から"若者"と記載された事項から5つの課題を明らかにした上で、この問題の根っことなる直近の問題を、**「フリーター／ニート／ひきこもり」と「ブラック企業」の2つ**であると予想し、今回は前者について検討しました。

【3】「フリーター／ニート／ひきこもり」に共通する問題として、「スキル問題」があることを指摘しました。「スキル問題」とは、雇用期間の制限、または、無職によって、いつまでも高度で希少価値の高いスキルを取得することができない問題であり、「**最初の就職でのスキル取得に失敗すると、そこからの復活戦が恐ろしく難しい** 」ことを指摘しました。

【4】しかし、その**「スキル」というものの実体が実に曖昧**であり、明文化、定量化できるものになっていない上に、本人の努力と本人の資質(才能)を分離せずに論じない抽象論が横行している現状を明らかにしました。さらに、客観的なスキルとは**「パソコンのWordやExcel」「TOEICのスコア」程度でしか定量化できない** という江端の持論を展開しました。

【5】「働き方改革実行計画」には、「ニート」「ひきこもり」に対する記載が一切ないことが気になり「ひきこもり」について調べてみたところ、**100万人オーダーの対象者がいる**ことが分かりました。そして「ひきこもり」に対する、世間のすさまじい憎悪を目の当たりにして、その憎悪のロジックを分析した結果、**『"憎悪"は、自己の日常の"我慢"とそれに対する"不公平**

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

感"から発生する』と結論付けました。

【6】「ひきこもり」の歴史をレビューして、この問題が、発生当時は子どもの問題だったのが、2000年頃から大人の領域にまで拡大してきたことが分かりました。そして、過去2回の「就職氷河期」によって、上記のスキル問題が、**数十万人のオーダーで発生している**ことを確認しました。

【7】「ひきこもり」の発生、理由、成立要件を明らかにした上で、**「ひきこもり」が、「社会」「親」「自分自身」の3者から攻撃を受け続ける過酷なものである**ことを解説しました。その上で、この問題に対する江端からの提言を行いました。

以上です。

では、最後に、「**なぜ私たちは、これほどまでに「ひきこもり」を憎むのか** 」に応える、一つの考え方を、システムエンジニアである江端から一言申し上げたいと思います。

前述した通り、私たちの社会は、一つの大きなシステムです。システムというのは、システムの目的に**「無関係」あるいは「無駄」ように見えるモノも含めて、一個のシステム**なのです。

これらの、一見「無関係」だったり「無駄」だったりするモノが、実はシステム全体を円滑に動かす、重要なシステム構成要素として機能することは、体内の免疫システムから、社会インフラシステムに至るまで、全てのシステムで通じるシステム論の常識です。

もし、強くて、人様に迷惑を掛けない人間だけで構成されるシステムであれば、セーフネット（安全や安心を提供するための仕組み（社会システムの場合は社会保障制度））は必要ないかもしれませんが、そのようなシステムは必ず自壊します。

なぜなら、システムは、その一部を壊しながら運用される続けるものだからです。**壊れる余地を残さないシステムは、システムとしては不完全であり、危険ですらあります。**

セーフネットは、弱くて、人様に迷惑を掛けているかもしれない人を保護しているのかもしれませんが、実際のところ、あなたはそんなことは忘れてしまって良いのです。

なぜなら―― **ニート/ひきこもりの人たちを守るシステムの機能の本当の目的は、「あなた」を守る安全装置だからです**。

ウエットで身内びいきでイモーショナルで過保護な父親……

後輩:「前回まで続いた”介護シリーズ”も含めて感じていたことなのですが、なんか最近、『江端さんらしくない』と感じます」

江端:「というと？」

後輩:「江端さんのこの連載コラムは、**人々の未来の夢や希望を、数字とロジックで打ち砕き、絶望という名の断崖絶壁から突き落とす**、というものですよね」

江端:「そんな趣旨の連載ではない」

後輩:「しかるにですね、前回の”介護シリーズ”にしても、今回から始まった”若者シリーズ”にしても、そこには、社会的弱者に対する、生暖かいというか、生煮えというか、実に江端さんらしくない、同情と共感と救済の論理が展開されていて ―― **はっきり言って、気持ち悪い**」

江端:「散々だな」

後輩:「でね、私なりに考えてみたのですよ。**何で、江端さんが、こんな似合わないコラムを書いているのか** 、と」

江端:「何だ」

後輩:「まず”介護シリーズ”ですが、これはお父上とお母上を思う、つらい日々の気持から発露しているものである、という

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

ことは簡単に推測できました」

江端:「で?」

後輩:「で、今回の、”若者シリーズ”ですよ。これが良く分からなかったのですが……ちなみに、**江端さんの娘さん、今、おいくつでしたっけ?**」

江端:「……長女は、来年から本格的な就活に突入する ―― そういう年齢だ」

後輩:「ああ、やっぱりね。つまり、そういうことですよ」

江端:「どういうことだ?」

後輩:「江端さん。自分で気がついていないんですか?　江端さんは、今回のコラムで、娘さんが陥いるかもしれない、ディストピアの一つを予測したんですよ」

江端:「え?」

後輩:「**『フリーター/ニート/ひきこもり』『ブラック企業』『スキル』、何もかもが、将来に発生し得る娘さんのトラブルの内容であり、そして、今回のコラムはそれに対する弁護や救済の理論になっているじゃないですか**」

江端:「あー……、言われてみれば、確かに、そうかもしれない」

後輩:「江端さんは、人間を社会システムの構成要素の一つと考えて、人工知能の制御対象の一つにしたい、とか言っていましたよね ―― ええっと、確か『アナログハック』でしたっけ*)」

*)関連記事:「「シュタインズ・ゲート」に「BEATLESS」、アニメのAIの実現性を本気で検証する」

江端:「ちょっと待て。それは完全なウソで、その上、あまりにも悪意に満ちているぞ」

後輩:「『人間を社会システムの構成要素として制御する』ですか?　ダメですね。江端さんには、そんなことを実行できるだけの器はありませんよ」

江端:「……」

後輩:「結局のところ、江端さんは、怜悧(れいり)でロジカルな研究員を装いながら、実際のところは、**ウエットで、身内びいきで、イモーショナルで、その辺に転がっている、孝行な息子であり、過保護な父親であり、凡庸な小市民**なんですよね。ええ、私は最初から知っていましたとも」

江端:「まあ、仮に私がそういうイモーショナルな人間であったとしても、それは、悪いことではないだろう?」

後輩:「いや、悪いですよ。**このコラムの執筆担当者としては、『最悪』と断じてもいい**くらいです」

江端:「なんで?」

後輩:「江端さんは、身内が関わっている世界観と、そうでない世界観との取り扱いが、180度逆転しているからですよ。このコラムは、『世界を「数字」で回してみよう』です。このコラムは、**人間の恣意を完全に排して、物事を数値だけで客観的に見ようという高い理念から始められた連載だったはずです**」

江端:「……お前。今まで一度だって、EE Times Japanのミーティングに、参加したことないだろうが」

後輩:「**当初の私たち**の高い理念に、『身内びいき』などという低レベルのイモーショナルを入れられては、困るんですよ。コラムの品質に関わる話なんですよ、分かっていますか?　江端さん」

江端:「だからお前は、編集長(竹本さん)でも編集担当者(村尾さん)でもないだろうが!」

後輩:「まあ、いいです。今回は、**特例として入稿を許可します**。でも今後は、当初の理念を忘れずに、ちゃんと精進してくだ

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

さいよ」

江端:「だ・か・ら・!!」

後輩:「ちなみに、江端さん、**今回、数値シミュレーションをサボりましたね。**私が見落としていると思ったら、大間違いですよ」

江端:「(ギク……!)え、いや、あのだなぁ。『ひきこもり』の時間軸方向の心理状態のモデル化まではしたんだよ。いや本当。本当だってば。ちゃんと証拠(コード)も出せるから。でも、計算結果が、あまりもショボくて……」

⇒「世界を「数字」で回してみよう」連載バックナンバー一覧

Profile

江端智一(えばた ともいち)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「こぼれネット」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連記事

人類は、“ダイエットに失敗する”ようにできている
今回から新シリーズとしてダイエットを取り上げます。ダイエット――。飽食の時代にあって、それは永遠の課題といっても過言ではないテーマになっています。さて、このダイエットにまつわる「数字」を読み解いていくと、実に面白い傾向と、ある1つの仮説が見えてきます。

非核三原則に学ぶ、英語プレゼンのポイント
海外でのミーティングに備えてどれほど準備を前倒ししようとも、当日はやはり、英語でプレゼンテーションをしなくてはなりません。ただし、プレゼンにも、われわれ「英語に愛されないエンジニア」が知っておくべきコツはあります。そのコツとは、ずばり、英語での議論が必要になる話題を「持たない」「作らない」「持ち込ませない」こと。つまり、非核三原則と同じように考えればいいのです。

トラブル遭遇時の初動方針は、「とにかく逃げる!」
どれだけ周到に準備をしたとしても完全には回避できない――。悲しいかな、トラブルとはそういうものです。悪天候でフライトがキャンセルされたり、怖い兄ちゃんが地下鉄に乗り込んできたり、“昼の”歓楽街でネーチャンにまとわりつかれたり……こういうものは、はっきり言って不可抗力です。実践編(海外出張準備編)の後編となる今回は、万が一トラブルに遭遇した場合の初動方針についてお話します。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

あなたは“上司”というだけで「パワハラ製造装置」になり得る
今回のテーマは「労働環境」です。パワハラ、セクハラ、マタハラ……。こうしたハラスメントが起こる理由はなぜなのか。システム論を用いて考えてみました。さらに後半では、「職場のパフォーマンスが上がらないのは、上司と部下、どちらのせい?」という疑問に、シミュレーションで答えてみます。

“電力大余剰時代”は来るのか(前編) ~人口予測を基に考える~
今の日本では、「電力が足りる/足りない」は、常に議論の的になっています。しかし、あと十数年もすれば、こんな議論はまったく意味をなさず、それどころか電力が大量に余る時代が到来するかもしれません。

「頭脳流出」から「頭脳循環」の時代へ、日本は“置き去り”なのか
今回は、「頭脳流出」と「頭脳循環」について、これまでの経緯と筆者の見解について述べたいと思う。アジアの「頭脳循環」に比べて、日本のそれは少し異なると筆者は感じている。

Copyright © ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.